

新たに提案する茶品種

(独)農業・食品産業技術総合研究機構 野菜茶業研究所 根角 厚司

はじめに

農業における品種の重要性はあらためて言うまでもないが、明治以降国策として発展した茶産業においても、品種の開発は重要なテーマであった。茶は1859年の横浜開港と同時に輸出が開始され、1868年には総輸出額の23%にも達し生糸に次ぐ主要な輸出品となった。輸出が始まると同時に日本茶は世界の中での競争にさらされ、必然的に生産性および品質の向上が求められた。そこで、明治政府は元幕臣であった多田元吉を内務省勸業寮に出仕させ、1875年に清国、1876年にインド、スリランカに派遣し、製茶技術や市場の調査を行わせているが、同時に中国やインドからチャの種子を購入し、日本への導入を図っている。1953年に茶農林1号として登録された紅茶用品種「べにはまれ」は、その時導入したアッサム種の後代である。また、1993年に育成された「べにふうき」は抗アレルギー作用で知られるメチル化カテキンを多く含んだ品種として注目されているが、この「べにはまれ」の子供であり、遺伝資源の重要性和地道に育種を続けることの必要性を示している。

第二次世界大戦後、日本は敗戦から

の復興を図るため茶の輸出拡大を目的に緑茶だけでなく紅茶の生産にも力を入れている。しかし、わが国の経済発展と紅茶の輸入自由化によって、世界的に生産される紅茶産業は壊滅的となり、緑茶の国内需要への対応に特化されていった。高度経済成長により国内の緑茶需要は拡大し、高度な機械化、高品質化は進んだが、一方で、高品質化、均質化を優先したためか、当時最も評価の高かった品種「やぶきた」が全茶園面積の約8割を占めるという一品種寡占状態となり、香味の画一化、多肥化、作業の集中化、気象災害等のリスク増大などを招く結果となった(図1)。

現在、わが国では世界中の様々な食材が入手でき、国民の食生活は極めて多様化している。また、核家族化、一人暮らしの増加、高齢化、人口減少など、人々の生活環境、ライフスタイル、経済状況など、日本茶をとりまく環境は大きく変化している。そのような中、これまで画一化の方向へと進んできた茶の需要は低迷しており、わが国の茶産業は厳しい状況にある。一方で、世界的な健康志向と発展途上国の経済発展により、世界の茶の需要はこの10年間で約100万トンも増加している(図2)。中でも緑茶の需要は倍増しており、ブラン

ド力のある日本茶への注目度は高まっている。国内茶産業を振興するためには、多様な香味や用途への対応、肥料や農薬の使用量の低減や新たな低コスト生産技術の開発が必要不可欠であり、こういったニーズに対応できる品種の開発が急務となっている。独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構(農研機構)では、チャの育種目標を国内外の多様な実需者ニーズに対応できる品種の開発に設定し、多様な香味や機能性に特徴ある品種、あるいは病虫害複合抵抗性品種の育成を行っており、近年いくつかの個性的な品種が育成されてきたので紹介する。

1. 「はるみどり」(濃厚なうま味で地域ブランド化に寄与)

「はるみどり」(茶農林48号)は、「かなやみどり」を母親に、「やぶきた」を父親に交配し、2000年に命名登録、2003年に品種登録した晩生品種である¹⁾。母親の「かなやみどり」は「やぶきた」の子供であることから、「はるみどり」は極めて「やぶきた」の血が濃い品種と言える。しかし、その香気は「やぶきた」とは明らかに異なり、濃厚なうま味と渋味の少なさが特徴である。甘さを抑えた高級な和菓子によく合うイメージである。

図1 茶栽培面積と品種茶園面積の推移

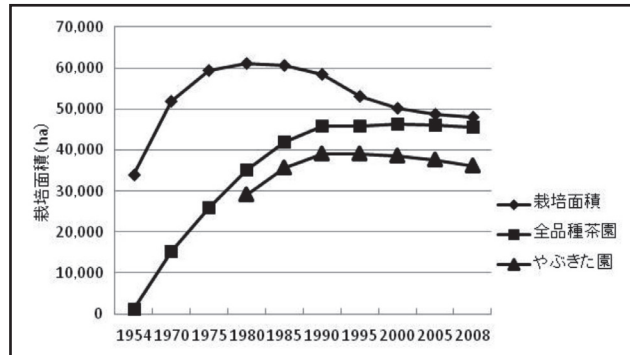


図2 世界の茶栽培面積および生産量の推移

